

「晴雨計・その後」⑬

「祭りの後」2

平山征夫

今、思えばこのタイトルは多分高校時代から友達とよく言葉遊びをしていて、その中で「今更、そんなこと言っても After Festivalだよ」と言っていたのがベースになっていると思う。

今年の東北三大祭りも終わった。三大祭りは最初の日銀勤務だった秋田でまず五〇年前「竿灯」を見て、それから二十五年後仙台の「七夕」を赴任した夏見た。さらにその十五年後に最後の青森の「ねぶた」を見た。全部見るのに随分日時がかかったものだ。

どの祭りにも参加している地元の人々の誇りと熱い思いが直接伝わってきた。同時に短い東北の夏祭りは何とも言えない侘しさが漂う。だから目一杯燃え上がる。燃え上がりすぎるのか青森では「ねぶたっ子」という言葉まである(その意味についてはここでは省く)。

二十四年前随筆で仙台七夕まつりについてワゴンセールや食堂のメニュー制限などに触れ、これでは「棚ぼた祭り」だと書いたら、中年の女性(らしい?)お二人から「よくぞ書いてくださった」と妙な礼状が届いた。そのうちの一通は支店長宅の近くの人で「秋に開かれるこの地域の大崎八幡宮の例大祭は、昔

ながらの趣があつて素晴らしいので是非ご覧ください」と添えてあった。この神社は散歩で訪れていたのも、神宮や境内の立派さから祭りもさぞかしと思つて居た。そこで期待して待って

いたら、丁度大祭の時期に急に知事選騒ぎとなり新潟に出向かざるを得なくなり叶わなかった。

仙台の七夕もその後見えないので、気になって先日仙台から来た人に確認したら相変わらずのようだ。テレホンカードはもうないが、七夕祭りの入った特製の煙草とビールが主のワゴンセールが溢れているようだ。その後札幌の雪まつり、京都の時代祭、富山・八尾の風の盆などいくつか有名な祭りを見

た。諏訪の御柱祭や郡上八幡や阿波踊り、鞍馬の火祭りなど見たい祭りはまだ沢山残っている。果たして叶うだろうか、自分の残りの生命力を思うと少し焦りを覚える。

二十四年前の晴雨計では「祭り」は大切な地域おこしにもなるので棚ぼた的なことをやっていて、皆から見向きされなくなつてからでは「後の祭り」だと書いた。今も基本的にはその意見は変わらないが、以前より「祭り」で地域おこしは難しい」と思っている。それがどんな有名な祭りであっても、都市の名前は有名にしてくれるが、年に数日の祭りで真の地域おこしは無理だ。祭りを含む通年観光づくり

がどうしても必要だ。全国一の夏祭りを持っている北東北は、一方でずっと全国一の過疎化の進む地域だ。それが現実だ。

自然資源や歴史遺産がなければ、自分たちの手で観光資源を作らなければならぬ。一挙に価値を生まないから五十年、百年かけて磨いていかななくてはならない。知恵も努力もいるが、こんな面白い遣り甲斐のある作業もないかもしれない。知事時代始めた十日町地域の「大地の芸術祭」の盛り上がりを見ているとそう思う。

の庭づくり」だ。今、長岡の県立近代美術館で「モネ展」が開かれていて、パリ郊外のジベルニーのモネの庭の絵も沢山展示されている。この庭で平松さんはスケッチし、作品にし「印象派・ジベルニーへの旅」という展覧会を各地で開いた。あの有名なモネの庭が平松さんの感性で琳派風の日本画の世界に見事に描かれた。展覧会后このシリーズの散逸を惜しんでどこか自治体なりに寄付したらという奥さんの薦めで、選ばれたのが「一番熱心に知事が見てくれた」(?)新潟県だった。しかもモネの庭の庭長から保証書付きで寄付された睡蓮の株も一緒である。早速、担当部署に指示して上、中、

下越三か所から候補地を選んで平松さんに見て貰ったら、中越・柏崎の候補地(産大と工科大の間)が気に入られた。さらにプランは膨らんで平松さんが籍を置いていた多摩美大の先生方の応援で、「新潟・絵を描く少年隊」を組織し、オランジュリーの地下の壁ぐるっと三六〇度取り巻いている「モネの睡蓮」の絵を子供たちと再現したいと言う。五〇年たって睡蓮が繁殖し水面を満たし、同時に植えた柳も大きくなって湖面に垂れ下がる景色を夢に描いて、もう一仕事と張り切って取り組んだ。

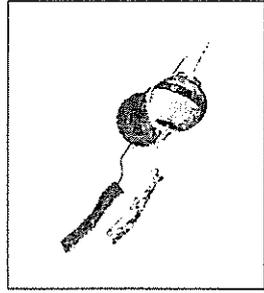
の押しつけでない市民要望の美術館を！」という市内美術関係者を中心とする人たちの議会への請願が採択されたのだ。「これは市立美術館ではありません。絵の寄贈がベースになった企画です」など説明をいくらしても通じなかった。しかも群馬での平松さんの前例なるものを引きあいに、平松さんの人格を疑うような話まで出てきたのは許せなかった。残念だけれど平松さんに直接事情説明して事業を中止した。教訓はいくつもあった。美術館組合の活動などへの配慮の無い地元文化人のメンツも大事にしなければならなかったのだろう。

この美術館が出来上がっていたら、今頃小さいけれどユニークな存在として柏崎に人々を招き寄せる魅力になっていたかもしれないと思うと残念だ。

ながら、もう一つ思うことは「生まれ故郷のこの花火、あと何回見られるのだろう・・・。」

(平成二十八年八月十九日)

今、その柏崎では年々花火が人気を呼んで多くの人が見に来るようになった。私が知事時代苦勞して延ばした港の突堤は今や恰好の打ち上げ場所だ。私はその中でも「尺玉一〇〇発同時打ち上げ」と言うのが大好きだ。二〇万人以上の人が訪れるようになった「柏崎祇園花火大会」だが、残念ながら一晩のイベントだ。何か通年観光の魅力が必要だ。それを考えるのが柏崎大使の私の今の役割だ。「何か良いアイデアはないかな」と考え



カット・工藤倫弘

夏が終わった。この夏、東北でどれだけ祭りが催されたのだろう。みちのくの夏祭りは、短い夏を惜しむ気持ち強いからか、他の地域にない盛り上がりが見られる一方、終わった後は、すぐそこに秋が来ていることを感じるせいか一抹の寂しさが漂う。そんな東北の夏祭りが私は好きである。

しかし、二十余年振りに東北地方勤務に戻ってみると、こうした東北の夏祭りにも時代の変化が感じられる。それは、各地で夏祭りにかなり力をいれてい

るが、そこにはこの夏祭りを「街起し」の起爆剤にしたいという狙いをもって、東北3大祭りとして知名度の確立した青森、秋田、仙台のように観光イベントとして夏祭りを活性化しようという動きがみられることである。

着任早々の多忙

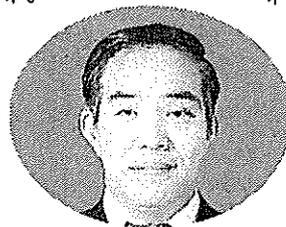
ただ、ひとつ気をつけなければ

りでなければ

随想

祭りの後

平山 征夫



の多い商店街の出店と、七夕メニューの飲食店にはうんざりさせられた。これでは、「棚ぼた祭り」だなどとい言いたくなってしまう。香具師の屋台を排除したのはひとつの見識であるが、私達が子供の頃おもちゃを買って貰ったり、金魚すくいをしたりしたあの祭りの日の胸のときめく想い出を今の子供達にどうやって与えてやれるのか、考えさせられたのは私だけだろうか。

さもあって仙台の七夕以外はテレビ等で観るしかなかったたので、私のこの感想は適切なのか自信はないのだが…。

「東京一極集中是正」と対の「こころ」地方の時代が叫ばれている。とくに開発の遅れていた東北地方では、高速交通体系の整備と相俟って、地方の時代

はならないのではと思うのは、各地の夏祭りには各々いわれがあり歴史があり、だからこそその地域の風土に根ざした特色があるわけで、その地方の独自性を薄めてしまう夏祭りの活性化であってはいけないと言っている。そして祭りの本来の目的は、観光客を沢山集めること

ば、いずれ地域の人々から忘れられてしまう。そうなるって悔んでもそれこそ「後の祭り」である。仙台の七夕祭りは、さすがに伝統のある夏祭りだけに見事な飾りと、その風情には感心させられた。その一方で、やたらとテレフォンカードと記念タバコ

ひらやま・いくお 横浜国立大経済学部卒。昭和42年日本銀行に入行、神戸支店営業課長、本店総務局広報課長、電算情報局総務課長、新潟支店長を経て今年5月から仙台支店長。新潟県柏崎市出身。48歳。